

滝ノ沢山遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書181集



2009

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



た　き　の　さ　わ　や　ま

滝ノ沢山遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書181集

平成21年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





遺跡遠景(南西上空から 奥は真室川中学校)

巻頭写真 1



陥穴検出状況(北西から)



調査区東側拡張部分(北西から)



搔器(56)出土状況



石核(82)出土状況



石錐(59)出土状況



縄文土器(25)出土状況



出土した代表的な石器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、滝ノ沢山遺跡の調査成果をまとめたものです。

滝ノ沢山遺跡は、山形県の北部に位置し、秋田県に接する最上郡真室川町に所在します。真室川町は豊かな山林を生かした農林業を主な産業とする町で、全国的に有名な民謡『真室川音頭』にも謳われているように「梅の里」としても知られています。

この度、山形県最上総合支庁による一般国道344号特殊改良一種事業に伴い、工事に先立つて滝ノ沢山遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、縄文土器や石器などが出土し、土器は縄文時代早期（約7,000年前）から後期（約3,000年前）にわたる様々な時期のものが見られました。特に、縄文時代早期の土器は最上地方ではあまり出土した例がなく、この地の研究を進める上で貴重な資料となります。

検出された遺構は陥穴や土坑が主であったことから、遺跡は狩猟場やキャンプサイト的な場として利用されていたものと考えられます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へ伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成21年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口常夫

凡　例

- 1 本書は、一般国道344号特殊改良一種事業に係る「滝ノ沢山遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、現地調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は山形県最上総合支庁の委託により、財団法人山形県郷土文化財センターが実施した。
- 4 本書の作成は福岡和彦、伊藤純子が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、佐東秀行、安部実、長橋至、伊藤邦弘、黒坂雅人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S K…土坑	S P…ピット	S L…炉跡（焼土）	R P…登録土器	R Q…登録石器
--------	---------	------------	----------	----------
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 8 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2002年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調査要綱

遺跡名	滝ノ沢山遺跡					
遺跡番号	平成14年度新規登録					
所在地	山形県最上郡真室川町大字大沢字滝ノ沢山					
調査委託者	山形県最上総合支庁					
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター					
受託期間	平成20年4月15日～平成21年3月31日					
現地調査	平成20年5月12日～7月30日					
調査担当者	調査課長	長橋至				
	課長補佐	伊藤邦弘				
	調査研究員	福岡和彦（調査主任）				
	調査員	伊藤純子				
調査指導	山形県教育庁文化遺産課					
調査協力	真室川町教育委員会					
	山形県教育庁最上教育事務所					
委託業務	基準点測量業務 有限会社京葉技術					
	地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務 株式会社シン技術コンサル					
	遺物実測業務 株式会社シン技術コンサル					
	理化学分析業務 パリノ・サーヴェイ株式会社					
発掘作業員	青山美喜子	前崎ケサ子	伊藤和枝	伊藤正三	伊藤千歳	大友亀代司
	杏澤豊子	黒井良子	佐藤一郎	佐藤カズ子	佐藤和子	佐藤国子
	佐藤輝雄	佐藤後行	柴田今朝吉	庄司正朔	庄司ミエ子	佐藤サチエ
	高橋ヨツ子	藤原淳子	水原庄一	(五十音順)		
整理作業員	會田知子	菅沼奈保美	鈴木照美	峯田優子	(五十音順)	

目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経緯	1
2	発掘調査の経緯	1
II	位置と環境	
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
III	調査の概要	
1	調査の方法	5
2	基本層序	7
3	トレンチ	7
IV	遺構と遺物の分布	
1	遺構の分布	9
2	遺物の分布	9
V	遺構と遺物	
1	検出遺構	14
2	出土遺物	15
VI	理化学分析結果	17
VII	まとめ	19
	報告書抄録	卷末

表

表1	遺跡地名表	5	表3	石器類表	37
表2	縄文土器・須恵器類表	36			

図 版

第1図	地形分類図	3	第11図	S L224-335焼土 S K 6-12-58-60-115土坑	22
第2図	遺跡位置図	4	第12図	S K116-122-132-140-142-158-160-	
第3図	滝ノ沢山遺跡調査区概要図	6		167-189土坑	23
第4図	基本層序図	7	第13図	S K193-215-245-253-274-375-409土坑	24
第5図	トレンチ断面図	8	第14図	S P20-24-36-65-104-121-147-152-200-254-	
第6図	遺構全体図	10		283-288ピット	25
第7図	遺構配図(1)	11	第15図	S P289-297-315-331-334-337-348-360-	
第8図	遺構配図(2)	12		367-374-384-387ピット	26
第9図	遺構配図(3)	13	第16図	縄文土器(1~21)	27
第10図	S K37-47-61-63縫穴	21	第17図	縄文土器(22~33)	

第18図 純文土器(34~49)・須恵器(50)	29	第22図 刃片(72~79)	33
第19図 石鏡(51・52・53・54)・搔器(55・56)	30	第23図 打製石斧(80)・石核(81・82)	34
第20図 剣器(57)・石錐(58・59)・刃片(60・61・62・63)	31	第24図 磨石(83・84)・凹石(85)	35
第21図 刃片(64~71)	32		

写真図版

巻頭写真1	遺跡全景	写真図版8	調査風景
巻頭写真2	陥穴検出状況	写真図版9	S K 6 土坑出土・縄文時代早期の土器
巻頭写真3	調査区東側拡張部分・搔器(56)出土状況 石核(82)出土状況・石錐(59)出土状況 縄文土器(25)出土状況		S P 65 ピット出土・縄文時代中期の土器 S P 337 ピット出土・縄文時代中期の土器 縄文時代中期・大木7b・8a式磨土器
巻頭写真4	出土した代表的な石器	写真図版10	縄文時代早期と前期大木4式磨土器
写真図版1	調査前の全景・完掘状況		遺構外出土・縄文時代前期の土器
写真図版2	調査区北側遺構検出状況・陥穴検出状況		S K 116・37土坑と S P 385 ピット出土
写真図版3	S K 37・47・61・63陥穴		の土器
写真図版4	S L 224・335焼土		遺構外出土・縄文時代後期の土器
写真図版5	S K 6・12・60・115・116・122・132・ 140土坑	写真図版11	平安時代・須恵器坏
写真図版6	S K 158・160・189・193・245・274・ 375・409土坑	写真図版12	S K 12土坑と遺構外出土の土器
写真図版7	S P 20・65・104・121・200・315・337・384 ピット	写真図版13	石鏡・搔器・削器・石錐 刃片
		写真図版14	打製石斧・石核・磨石・凹石

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

滝ノ沢山遺跡の発掘調査は、山形県最上総合支庁による一般国道344号特殊改良一種事業に併せて実施された。

一般国道344号は秋田県湯沢市を起点に、真室川町を通じて庄内地方の酒田市を終点とする道路であり、山形県の交通の大動脈になっている国道13号と国道7号を結ぶもので、真室川町にとっては、町の産業や経済、文化の発展を支える重要な役割を担ってきた道路である。本事業は、真室川中学校校前の真室川町大字大沢字滝ノ沢山（通称「秋山」）から蠟喰に通じる部分の急カーブや急勾配を解消し、歩道の付いた通常にも安全な道路にする目的で実施されることとなった。

事業が開始されるのに先立ち、山形県教育庁社会教育課文化財保護室（当時）では、平成14年11月1日～12日にかけて、計画路線内で遺跡が立地すると考えられる平場に1×1mの試掘区を概ね10mに1ヶ所の割合で設定し、22ヶ所の試掘区を掘って分布調査を行った。その結果、本遺跡は繩文時代後期のもので、東西65m、南北90mほどの広がりをもつものと推定された。

以上のような経緯を踏まえ、財團法人山形県埋蔵文化財センターでは、山形県最上総合支庁からの委託を受け、平成20年5月12日から7月30日にかけて、最上総合支庁建設部道路計画課と協議を重ねながら、路線区内にかかる遺跡1,500m²について、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施するに至った。

2 発掘調査の経緯

5月12日～16日（第1週） 現地調査開始、器材搬入と開始式。重機による表土除去をする前に、調査する範囲と深さを知るために、人力による調査区の周りの線掘りを行った。また雑木林伐採後に片付けられた木材が調査区内に残存していたり、未伐採の樹木が調査区内に残っていたりしたため、それらを片付けながらの作業となってしまった。14日から重機による表土除去に入る。

5月19日～23日（第2週） 重機による表土除去・ス

ロープ成形が21日に終了。その後調査区内に残った木根の抜根作業と、調査区の広がりを確認するため、調査区奥の西斜面に3本のトレンチを掘った。

5月26日～30日（第3週） 基準杭を設置（委託業務）して4m方形のグリッド設定が完了し、面整理と遺構検出を進める。

6月2日～6日（第4週） 調査区奥東側の檍際に遺物集中域を検出。土器片や石器が多数出土。

6月9日～13日（第5週） 3分の2の面整理が終わり、陥穴4基や土坑など多数検出。遺構配置図や遺物分布図の作成にかかる。

6月16日～20日（第6週） 調査区全体の面整理が終了。陥穴、焼土を含む遺構、土坑、ピット、倒木痕など約200基検出。

6月23日～27日（第7週） 遺構精査に入り、併せて断面図作成や土層注記を行った。

6月30日～7月4日（第8週） 引き続き、遺構精査と遺構の図面作成（断面図・平面図）、標高探録等を行う。また、遺構断面・遺構の完掘状況・遺物出土状況等の写真記録も随時行っていた。

7月7日～10日（第9週） 遺構精査がほぼ終了。真室川町議会総務文教委員会、安楽城小学校5～6年生が視察・見学に訪れる。

7月14日～18日（第10週） 15日に現地で発掘調査説明会を開催。真室川中2年生、町民、関係者合わせて130名超の参加。報道機関による取材もあり、新聞で説明会の様子が紹介された。また、ラジオコントロールヘリコプターを用いた空中写真撮影も行った。

7月22日～25日（第11週） 陥穴を断ち割り、断面図と写真に記録する。また、倒木痕等も完掘。

7月28日～30日（第12週） 29日にすべての遺構を完掘。標高探録を終えたものから、陥穴や深い土坑等を埋め戻す。30日に最上総合支庁建設部道路計画課に、現地の引渡しを行う。その後、すべての器材を撤収して、現地調査を終了した。

II 位置と環境

1 地理的環境

真室川町は、山形県の北端、秋田県に接する人口約1万人の町である。町域のおよそ80%が山林で、古来より林業の町として栄えてきた。秋田県との県境付近には神室山、加無山、鶴山、丁岳などの高峰が連なり、一帯は加無山県立自然公園に指定されている。町域を流れる川のほとんどがこれら県境の山々に源を発し、複雑に河岸段丘、小扇状地を形成しながら、町の東部を流れる真室川と西部を流れる鮭川に集まり、町の南端部で合流し、やがて最上川へと至る。標高1000m前後の急峻な奥羽山系、鳥海山系に囲まれた地形から、台風期などの多雨時期には局地的豪雨がもたらされ、各河川の流路の狭さとあいまって、過去に幾度となく大水害を経験した地域もある（第1図）。

最上郡は概ね内陸性の気候である。寒冷多湿で、とりわけ冬季の降雪量は全国的にも多く、年間の積雪期間は100日を超える。また日照時間も県内の他地域に比べて短く、くだもの王国として知られる山形県においては、例外的に果樹栽培が困難な地域である。農業は水稻、畑作が主体であるが、近年ではこの厳しい自然環境と豊かな山林資源を利用して、たらの芽やきのこなどの山菜の生産加工、良質の木材加工、ニジマス、アユなどの養殖が盛んに行われている。また、温泉施設の充実や観光客の誘致にも力を入れている。

滝ノ沢山遺跡はJR真室川駅の北西約2km、真室川と鮭川に挟まれた、真室川中学校の南200mの高位段丘上に立地している。標高は134mを測り、地目は雜木林であった。小字名は「滝ノ沢山」であるが、町民の間では「秋山」という呼称で呼ばれている。同じ秋山地区内には、真室川梅林公園や秋山牧場、平成16年の冬季国体でクロスカントリースキーの会場にもなった秋山スキーフィールドがある。国道344号から遺跡に通じる部分が、その国体時の駐車場になっていた関係で、1m超の堅くしまった盛土が遺跡の一部にかかっている部分も見られた。

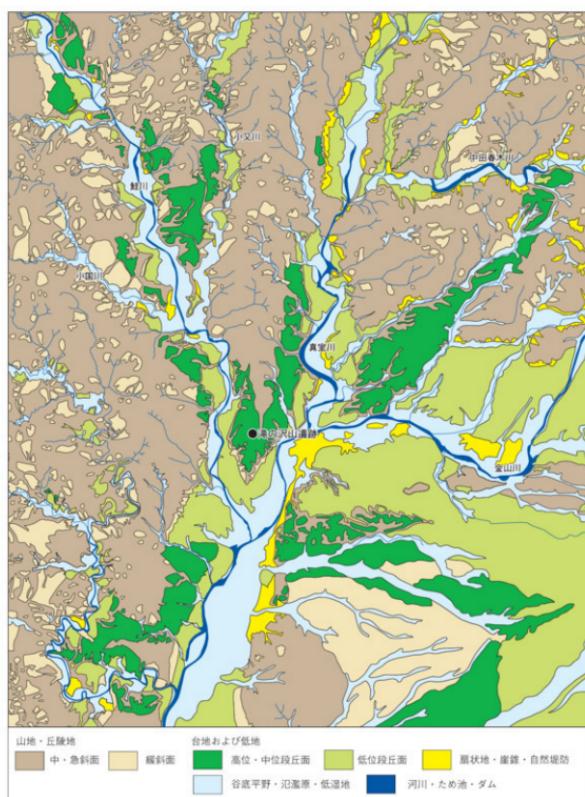
2 歴史的環境

真室川町は中世には鮭延郷と称され、戦国期に入ると鮭延氏が真室川沿岸に鮭延城を築き、城下町をつくった。周辺には庭月館、平岡館、砂子沢館、首鍋館など城館跡も数多く存在する。真室川町内では現在、約70の遺跡が確認されている。このうち縄文時代の遺跡は50以上を数え、その多くが河岸段丘上に立地している（第2図）。

真室川の支流にあたる塙根川の上、中流域にある八敷代地区と釜淵地区には、旧石器時代から縄文時代の遺跡が集中している。八敷代地区にある中台4・5遺跡からは、複式炉を伴う竪穴住居跡6棟や河川跡などの遺構と、約70箱の縄文時代中期末葉から後期初頭を主体とする土器、石器類が出土した。また釜淵地区的釜淵C遺跡からは、複式炉を伴う竪穴住居跡11棟と祭祀的な配石・配列遺構群が検出された。縄文時代後期末葉から晩期後葉にかけての土器や石器類合わせて900箱を超える出土もあった。この釜淵C遺跡は、別称「五郎前遺跡」とも呼ばれ、大正4年（1915）に縄文時代晩期の土偶が発見された場所としても有名である。この土偶は国の重要文化財に指定され、現在は真室川町新町の正源寺が所蔵している。

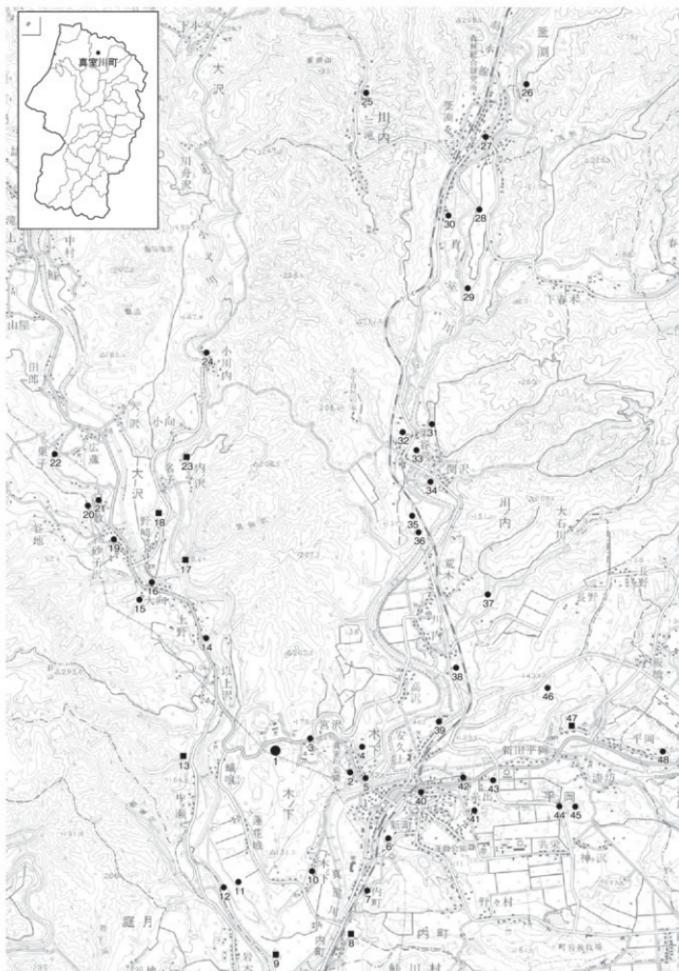
縄文時代前期のものとしては、真室川町の東町遺跡で大木2式期、悪土遺跡では水田耕作時に大木5式期の土器が発見され、昭和32年に山形大学の柏倉亮吉により発掘調査が行われている。この滝ノ沢山遺跡のある真室川と鮭川とに挟まれた秋山地区では、これまで旧石器時代から縄文時代前期・中期にかけての遺跡が3ヶ所で確認されている。

真室川町には縄文時代中期の遺跡が最も多く、更に中期を主として後・晩期にわたる複合遺跡が多いことも特徴的である。ただ、最上郡内での縄文時代早期の遺跡の発見例はごく稀で、新庄中核工業団地造成工事に伴う福田山A遺跡・仁間磯ノ沢B遺跡からの縄文時代早期の遺構・遺物が出土した例はあるものの、真室川町では木ノ下の水田から採取された、縄文時代早期後半に属する尖底土器の破片が発見された程度である。



第1図 地形分類図 (S=1:50,000) (山形県「地形分類図大沢・羽前金山・清川・新庄」を元に作成)

II 位置と環境



第2図 遺跡位置図(国土地理院発行5万分の1地形図「大沢」「羽前金山」を使用)

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	浅ノ沢山遺跡	勢張場跡	縄文	25	三瀬2遺跡	集落跡	縄文
2	秋山A遺跡	集落跡	縄文	26	新瀬A遺跡	集落跡	縄文(中期)
3	秋山B遺跡	散布地	旧石器・縄文	27	新瀬B遺跡	集落跡	縄文(中期)
4	秋山C遺跡	集落跡	縄文(前・中期)	28	新瀬C遺跡	集落跡	縄文(中・晚期)
5	宮沢遺跡	集落跡	縄文	29	新瀬D遺跡	集落跡	縄文(中・晚期)
6	小林遺跡	集落跡	旧石器・縄文	30	新瀬E遺跡	集落跡	縄文
7	正源寺境内遺跡	集落跡	縄文(中期)	31	壹野遺跡	集落跡	縄文(中期)
8	鰐城跡	城館跡	中世	32	栗谷沢B遺跡	集落跡	縄文
9	オクミ層跡	船跡	中世	33	栗谷沢A遺跡	集落跡	縄文(中期)
10	木の下遺跡	集落跡	縄文(後期)	34	間沢遺跡	集落跡	縄文
11	葦花城遺跡	散布地	縄文(前期)	35	畠野A遺跡	集落跡	縄文(中期)
12	霧の原遺跡	散布地	縄文(後期)	36	畠野B遺跡	集落跡	縄文(中期)
13	中ノ瀬層跡	船跡	中世	37	柏木野遺跡	集落跡	縄文(中期)
14	上野遺跡	集落跡	縄文(中期)	38	川の内遺跡	集落跡	縄文(中・後期)
15	大向A遺跡	集落跡	縄文	39	悪戸遺跡	集落跡	縄文(前期)
16	大向B遺跡	集落跡	縄文	40	山神社遺跡	集落跡	縄文
17	宮田沢山上層跡	船跡	中世	41	糸出遺跡	集落跡	縄文(中・晚期)
18	野崎層跡	船跡	中世	42	糸出稻荷神社遺跡	集落跡	縄文(晚期)
19	砂子沢遺跡	集落跡	縄文(中期)	43	新平岡遺跡	集落跡	縄文(中期)
20	古屋敷遺跡	集落跡	縄文	44	塩野遺跡	集落跡	縄文(後期)
21	砂子沢層跡	城館跡	中世	45	片杉野遺跡	散布地	縄文
22	果子遺跡	集落跡	縄文(中・後期)	46	長野遺跡	集落跡	縄文(中期)
23	内の沢層跡	船跡	中世	47	平岡層跡	船跡	中世
24	小川内遺跡	集落跡	縄文(後・晚期)	48	平岡遺跡	集落跡	縄文(中期)

III 調査の概要

1 調査の方法

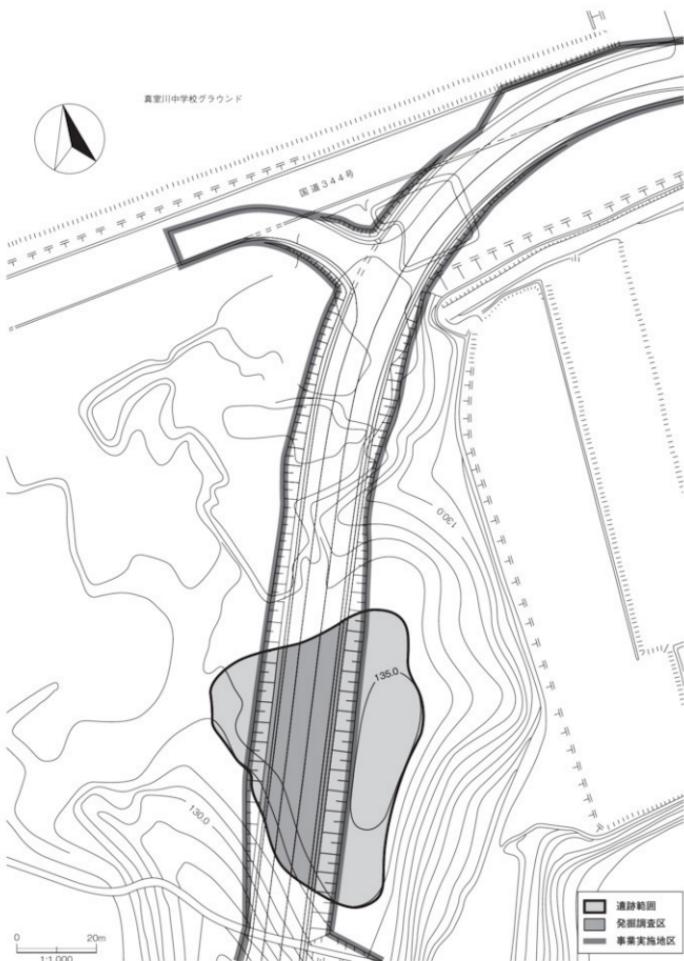
浅ノ沢山遺跡の発掘調査では、遺跡・遺構の明確な位置を記録するために、平面直角座標系第X系(世界測地系)を基準としたグリッド網を設定した。測量基準杭の設定と水準点の移動にあたっては業者委託により、国道344号改良工事4級基準点のうち2点を視準点とし、調査区内に公共座標杭を設置し本遺跡のグリッド設定の基準杭とした。この公共座標のX Y軸を基準に座標計算を行い、そのデータを基に、遺跡内に4m四方のグリッド網を設定した。各グリッドはX:-125,944.000,Y:-51,848.000を起点に、南から北に向かって1、2、3、4…と付した算用数字と、西から東に向かって1、2、3、4…と付した算用数字の組み合わせによって表示し、2-10グリッドや15-2グリッド等と呼称した。これらの各グリッドは、

遺物の出土位置の表示、遺構の位置表示を行うためのものであり、遺構の平・断面の記録化作業の基準になるものである(第6図)。

遺構の掘り込みにあたっては、遺構の大きさや深などを考慮しながら写真撮影や実測図等の作成を行った。陥穴については、掘り下げるための幅が十分にとれないこと、また土の埋り方を記録するため、断面を拡張して断ち切った。遺構から出土した遺物は、遺構名や登録遺物番号を記載し、遺構外遺物はグリッド名で取り上げた。

記録写真撮影は、調査の進捗に合わせて随時6×7と35mm判のフィルムカメラ、及びデジタルカメラを使用し、全景等は4×5カメラも併用した。調査の最後には、(株)シン技術コンサルに委託し、上空からの俯瞰撮影と、調査区内遺構の平面図・全体図の記録図作成を実施した。

III 調査の概要



第3図 深ノ沢山遺跡調査区概要図 (S=1:1,000) (一般国道344号道路改良工事平面図を使用)

2 基本層序

滝ノ沢山遺跡における堆積土は、調査区内においてはほぼ一様である。大きく3層に分層され、I～III層と表記した。調査区は南北に90mと長く、また東から北西の方向へ高低差で2.3mと急激に下っているため、調査区内の5ヶ所(A～F)で土層の記録を行った(第4図・第6図)。堆積層の状態については、主に色調と土質、層厚を記し、合わせて観察時の所見を記した。以下各層の特徴を述べる。

I層：黒褐色シルト層 厚さ15～25cm。クリやナラなどの枯葉が堆積し腐葉土化したものと考えられる。表面にはまだ腐葉土化していない枯葉が積もっている。

II層：暗褐色シルト層 厚さ10～25cm。III層の褐色シルトが少量と、I層と同様の木根や根毛を少量含む層である。

III層：褐色シルト層 厚さ10～25cm。地山面の黄褐色粘質シルトとI・II層にも見られた木根・根毛を少量含む層である。本層を遺物包含層と推定できる。

堆積土には腐葉土やシルト層が多く、粘土質の層がほとんどないため水はけもよく、降雨の後でもすぐ調査を行いうことが可能であった。

3 トレンチ

遺跡範囲の広がりと土の堆積の仕方を確かめるために、調査区の一番奥にあたる区域、沢に向かって急激に下っている斜面の部分3ヶ所にトレンチ1・2・3を設定した(第5図～第9図)。基本層序と同じように堆積土を1～7層と表記し、各層の特徴と所見を述べる。

1層：褐色シルト層 厚さ15～60cm。

2層：黒褐色シルト層 厚さ20～60cm。腐葉土。

3層：黄褐色シルト層 厚さ20～50cm。直径5～10mm大の礫を少量含む層である。

4層：黒褐色シルト層 厚さ20～60cm。

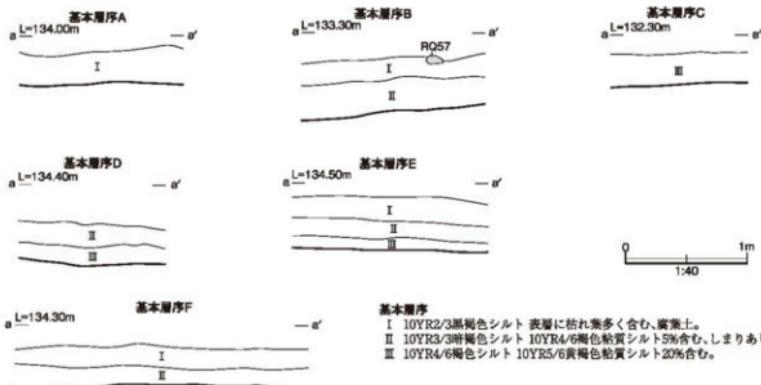
5層：ぶい褐色シルト層 厚さ10～20cm。木根や根毛、枯葉を多量に含む腐葉土層である。

6層：暗褐色シルト層 厚さ10～30cm。

7層：褐色シルト層 厚さ10～20cm。

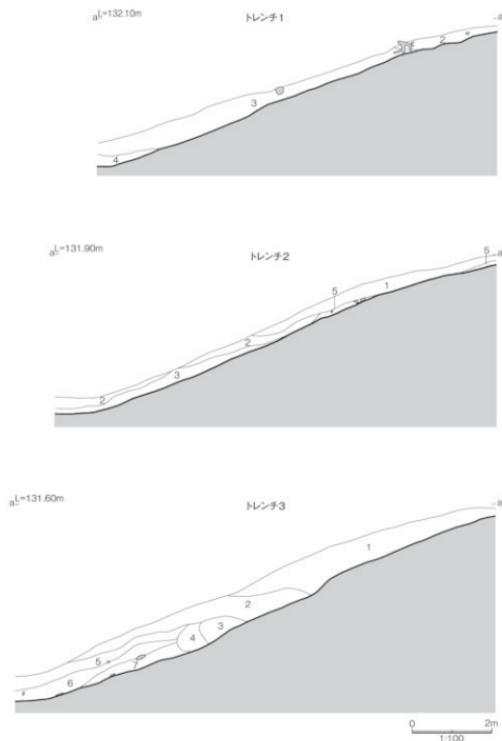
沢に向かっての傾斜がきついため、表面の土が何度も流されては積もり、流されては積もりを繰り返してできた堆積層と考えられる。

3本のトレンチを掘り込んだいすれの層からも流れ込んだ遺物などは検出されず、遺跡範囲の広がりは見られなかった。



第4図 基本層序図

III 調査の概要



第5図 トレンチ 断面図

IV 遺構と遺物の分布

1 遺構の分布

東西65m、南北90mを測る遺跡範囲のうち、事業に係る面積1,500m²を発掘調査した。

遺跡周辺においては、国道344号から調査区近辺までの敷地が、平成16年の冬季国体時に駐車場用地として利用されていたことから、かなりの盛土がなされている状態であった。

また、その駐車場用地の隣が建設会社の廃土置き場になっており、調査区内の遺構を壊すまでには至らなかつたものの、その残土と産廃と思われる流れ込みが、調査区北西角の壁面に見られた。

調査で検出された主な遺構は陥穴、土坑、ピット、焼土などで、縄文時代のものが大半を占める。

遺構の分布状況は、調査区奥（南側）が希薄で、その区域を除いては、ほほんべんなく確認することができた（第6～9図）。

遺構等では、縄文時代の陥穴が4基、調査区中央南寄り8～9-3～6Gで検出された。

土坑やピットは、調査区南側の遺構が希薄な区域を除いては、おむね調査区内のどのグリッドからも検出された。

火を使った跡と思われる焼土が、15-7Gと21-8Gの2ヶ所で検出されたが、周辺からは住居跡や炉をなすようなピットなどを確認するには至らなかった。

2 遺物の分布

遺物は、整理箱にして3箱出土した。

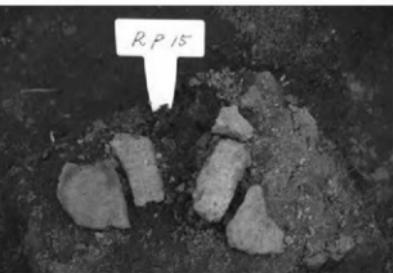
縄文時代の土器や石器などが大半を占め、それ以外では、平安時代の須恵器壊の破片が1点の出土である。

土器はすべて破片で、全部で135点の出土があり、その内陥穴や土坑、ピットなどの遺構内から出土したもののが58点、遺構外から出土したものが77点で、遺存状態はおむね良好であった。

出土した石器75点のうち、10点が遺構内からの出土で、残る65点が遺構外からの出土であった。

また、面整理工業中に調査区奥東側の壁面から土器や石器がまとまって検出されたため、長さ15m幅0.5mの範囲を拡張して調査を行った。

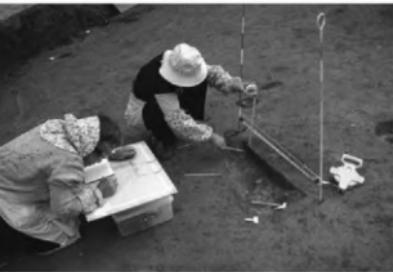
その結果、調査区を拡張した区域から土器と石器合わせて20数個の出土があった。



遺物出土状況



土坑掘り下げ状況

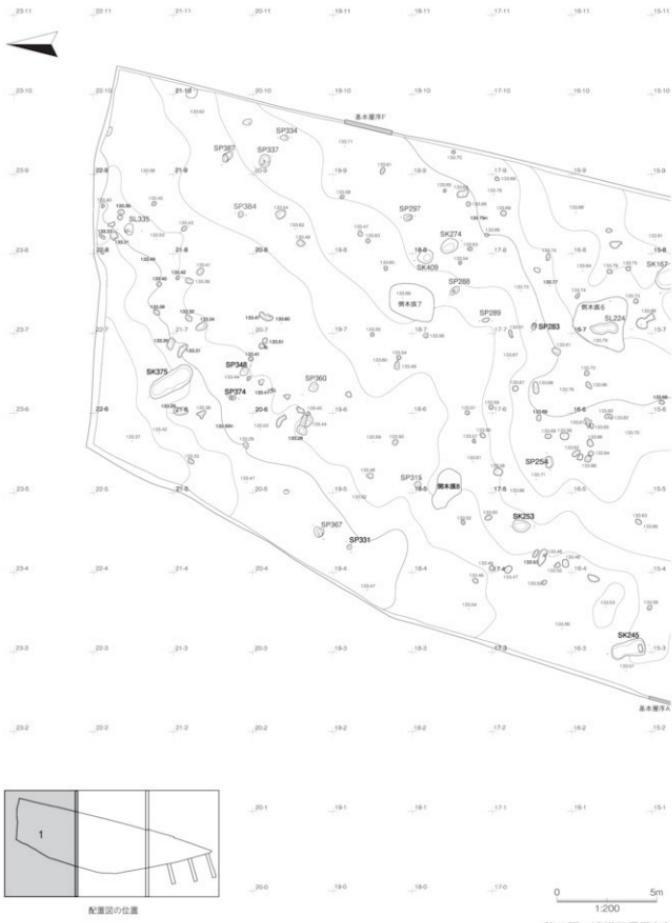


遺構断面図作成状況

IV 遺構と遺物の分布

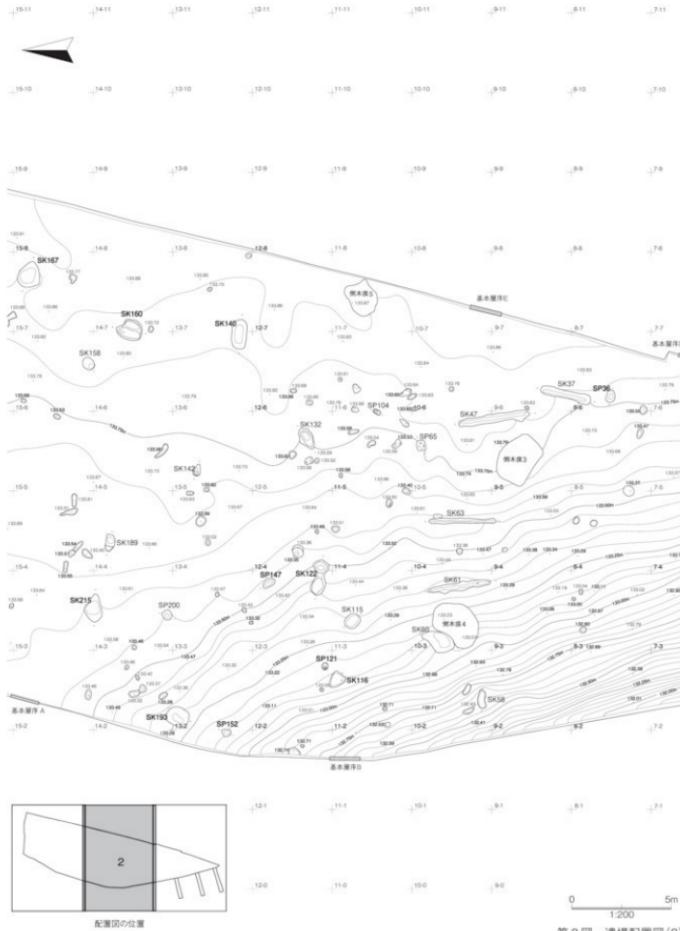


第6図 遺構全体図

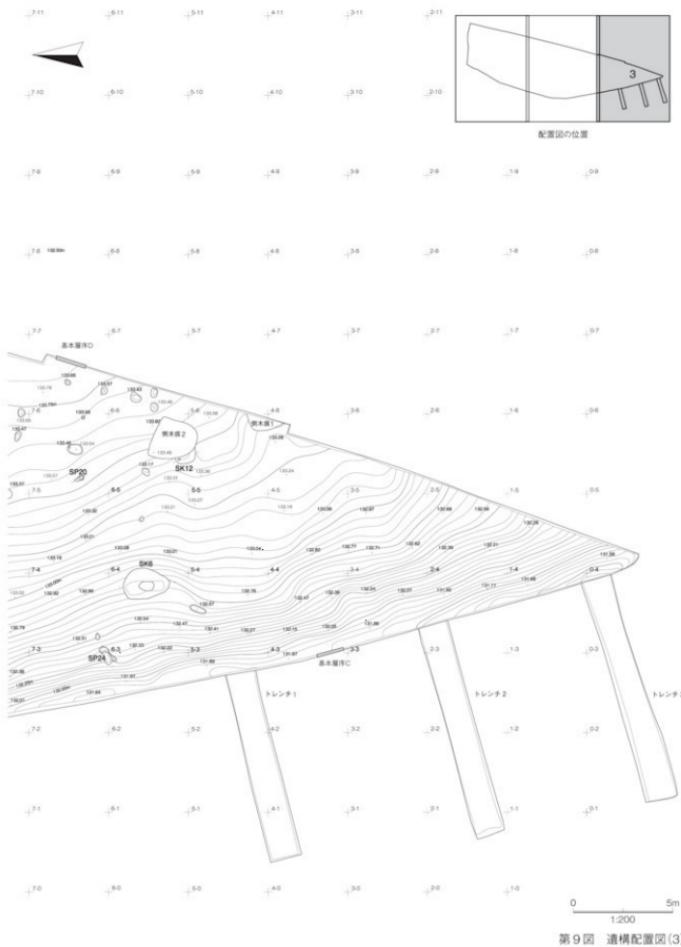


第7回 遺構配置図(1)

IV 遺構と遺物の分布



第8図 遺構配置図(2)



第9図 遺構配置図(3)

V 遺構と遺物

1 検出遺構

検出された主な遺構は、陥穴、土坑、柱穴、焼土などである。堅穴住居などは検出されないが、遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代と推定されるものが多い。

(1) 陥 穴

陥穴は調査区中央南寄りのグリッドから、4基検出された。いずれの陥穴も、長軸方向はほぼ北を示すようにして検出された。

S K37陥穴（第10図 写真図版3）

中央部南東寄りの8-6 Gで検出された。平面形は長径2.6m、短径0.3mの細長い不整楕円形を呈する。確認面からの深さは11mを測り、断面形は長方形で、底面は中央部が少し盛り上がる細長い楕円形となる。覆土は4層に分かれ、覆土の2層目から縄文土器片や剥片が出土した。

S K47陥穴（第10図 写真図版3）

中央部南東寄りの8-5 Gで検出された。平面形は長径3.6m、短径0.25mの細長い不整楕円形を呈する。確認面からの深さは1mを測り、断面形は長方形で、底面は平坦な細長い楕円形となる。覆土は4層に分かれ、ほとんどが黒褐色シルト層だが、途中に粘質のシルト層が混じる。覆土の1層目から縄文土器片が、2層目から剥片が出土した。

S K61陥穴（第10図 写真図版3）

中央部南西寄りの9-3 Gで検出された。平面形は長径3.2m、短径0.25mの細長い不整楕円形を呈する。確認面からの深さは1mを測り、断面形は長方形で、底面は細長い楕円形となる。覆土は2層に分かれ、覆土の1層目から縄文土器片が出土した。

S K63陥穴（第10図 写真図版3）

中央部南寄りの9-4 Gで検出された。平面形は長径3.4m、短径0.24mの細長い不整楕円形を呈する。確認面からの深さは1mを測り、断面形は長方形で、底面も細長い不整な楕円形となる。覆土は黄褐色シルトの混じる

黒褐色シルトが1層で、覆土からは縄文土器片と剥片が出土した。

(2) 焼 土

調査区の北側で2ヶ所、暗褐色シルトが被熱し、赤褐色に焼けた焼土が検出された。周辺にはいくつかのビットが検出されたものの、住居跡の炉跡をなすものかどうかは確認できなかった。しかし、ここでは2基の焼土に炉跡の記号であるS Lを用いた。

S L224焼土（第11図 写真図版4）

中央部北東寄りの15-7 Gで検出された。焼土の平面形は不整楕円形で、大きさは1.2m×0.5mを測る。焼土の厚さは15cmを測る。どちらが先かはっきりしないが、倒木痕2と切り合う。

S L335焼土（第11図 写真図版4）

調査区北端21-8 Gで検出された。焼土の平面形は円形で、大きさは30cm×30cm、焼土の厚さは10cmを測る。焼土にはII層の暗褐色シルトと炭化物粒も少量混じっていた。

(3) 土 坑

S K6土坑（第11図 写真図版5）

中央部南西寄り斜面の5-3 Gで検出された。平面形は長径2.4m、短径1.5mの不整な楕円形を呈する。確認面からの深さは50cmを測り、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる。覆土から縄文時代早期の土器片が多数出土した。

S K12土坑（第11図 写真図版5）

中央部南東寄り壁際の5-5 Gで検出された。平面形は倒木痕2に切られているため不整な半円で、長径1m、短径0.4mを測る。覆土から縄文時代中期の土器片が出土した。

S K116土坑（第12図 写真図版5）

中央部やや南西寄りの10-2 Gで検出された。平面形は長径0.8m、短径0.6mの不整な三角形で、確認面からの深さは10cmを測る。覆土から縄文時代早期の土器片が

出土した。

S K245土坑（第13図 写真図版6）

中央部やや北西寄りの壁際15-3Gで検出された。平面形は長径1.7m、短径0.7mの不整な長方形を呈する。確認面からの深さは20cmを測り、底面も確認面とはほぼ同じ形状を呈していた。40cm×20cm大の石が土坑南側に置かれるよう埋まっていたため、墓壙の可能性もあり理化学分析を行ったところ、その可能性は低いとの分析結果を得た（第VI章）。

(4) その他の土坑（第11～13図 写真図版5・6）

「その他の土坑」として一括したものと、次の3種に分類する。

A類：平面形が円形・梢円形を呈し、断面が浅鉢状になる。

（SK58・115・189・253・274）

B類：平面形が円形・梢円形を呈し、掘り込みが30～50cmと深い。

（SK60・132・140・142・158・375・409）

C類：平面形が不整な方形を呈する。

（SK122・160・167・193・215）

これらのほとんどの土坑は調査区中央近辺と、それより少し北側で検出された。すべての土坑の覆土はシルト層で、根毛などを含んでいた。

(5) ピット群（第14・15図 写真図版7）

今回の調査で検出したピット（小穴）は、ピットの底の部分から縄文土器が出土したものなど縄文時代のものもあるが、流れ込みの可能性もあるので、はっきりした時期は特定できない。ピットは、土坑がまとめて検出された中央部には少なく、北側と中央部南西寄りの地点から多くのものが検出された。形態的には円形・梢円形の平面形を基調としたものが主であり、覆土内から縄文土器や石器の剥片が出土したものも多い。

ピットの形態や構造から、次の3種類に分類する。

A類：平面形が円形梢円形を呈し、断面が浅鉢状になる。

（SP36・147・283・289・337）

B類：平面形が円形梢円形を呈し、掘り込みが30～50cmと深い。

（SP65・254・315・348・360・384）

C類：検出面の中央に柱痕跡のような土色の変化が見ら

れるもの。

（SP104・200・288・367・387）

A類は浅い掘り込みで、堆積土が単純層を見せるものが多い。覆土からSP36では剥片が、SP337からは縄文時代中期の土器片が出土した。B類のSP65は確認面から30cmの深さを持ち、確認面から20cmの1層と、底の部分から縄文時代中期の土器片が出土した。C類のSP104とSP200は、ともに黄褐色シルト層の上に硬くしまった褐色シルト層が堆積するという柱痕跡と推定される形態をなしていた。また、SP20からは少量の明赤褐色の焼土と炭の破片・木の実が、SP121からは縄文時代早期のものを含む土器片が出土した。

2 出土遺物

(1) 縄文土器

土器の出土量は整理箱にして2箱分であり、量的に少ない。完形品ではなく大半は小破片で、復元して器形が窺えるものは稀だった。時期は縄文時代早期中葉から後期後葉にかけてと、時期幅がある。

縄文時代早期の土器

第16図1～7（写真図版9）は、SK6から出土した。いずれも器面に貝殻腹線圧痕を施し、胎土に砂粒や石英、海綿骨針などの混入が目立つ。1～3は同一個体と考えられる。7については摩滅が激しく、貝殻腹線圧痕文か沈線文のかはっきりしない。早期中葉の田戸下層式期である。第16図10（写真図版10）はSK116出土で、だいぶ摩滅しているものの沈線文が施され、同時期に分類される。同じ最上地方で新庄市の福山田A遺跡と仁間磯ノ沢B遺跡から、同じような縄文時代早期の土器の出土例がある。

第17図22・24（写真図版10）は、早期末葉の茅山上層式に分類した。22はSP121出土のもので、外面に竹管刺突文、内面に貝殻条痕が施されている。24は外面に縄文、内面に条痕文が施されていた。胎土にはいざれも砂粒と石英が混入していた。

縄文時代前期の土器

第17図25～28（写真図版10）は遺構外出土の土器であるが、縄文時代前期に属する。26・28は外側に網目状撚糸文が施され、同一個体と考えられる。時期は前期前

葉から中葉にかけてである。25は外側に小波状文が施され、時期としては縄文時代前期後業、大木4式期に位置づけられるもので、県内では高畠町押出遺跡での出土が有名である。胎土には砂粒と石英が混じり、外面に炭化物が付着していた。

縄文時代中期の土器

第17図29（写真図版9）と第18図34（写真図版11）はどちらも遺構外出土の土器だが、29の外面には平行沈線文が、34の外面には撫糸圧痕文が施されている。時期としては縄文時代中期前葉の大木7b式期に相当するものと考えられる。

第17図30～33（写真図版9）はいずれも遺構外出土の土器だが、縄文時代中期中葉の大木8a式期に位置づけられる。30・31の外面には波状文と刻目が、32には沈線文、33には刻目が施されている。胎土にはいずれも砂粒や石英などが混じる。大木7b式期や大木8a式期の土器は、近くでは新庄市の中川原C遺跡で出土した例がある。

第16図12～15（写真図版9）は、S P 65から出土した。胎土にはいずれも砂粒や石英などが混じり、外面に縄文はあるがそれ以外の文様ははっきりしない。12・13はともに内外面が被熱により器面が剥落しており、同一個体のものと考えられる。第16図16～21（写真図版9）はS P 337出土のもので、いずれも胎土や縄文原体のLR、器厚などがほぼ同じで、これらも同一個体と考えられる。その他の外面の縄文しかはっきりしない土器も、ほとんどが縄文時代中期のものと推定される。

縄文時代後期の土器

第18図48（写真図版10）は外面に突起が付いており、時期としては縄文時代後期初頭に位置づけられる。胎土には粗砂と石英が混じる。49は瘤付きで平行沈線に刻みも加えられている。胎土が褐色で、石英も際立ち非常に精選されたものである。内面もミガキを入れ、きれいに仕上がっている。時期としては縄文時代後期後葉に位置づけられる。

（2）石 器

石器は全部で75点出土したが、そのうち35点を掲載した。掲載しなかった石器40点の内訳は、磨石1点、礫3点、剥片36点である。

石 鑿（第19図51～54 写真図版12）

石鑿は4点とも遺構外からの出土で、短握形のものはなくいずれも握形を呈し、頁岩を石材としている。51のみ両面加工が施され、刃部は弧状を呈する。他3点には片面加工が施される。刃部は53が弧状を、52・54は直線状を呈する。

搔 器（第19図55・56 写真図版12）

两者とも末端部に急角度の加工が施され、刃部が作出される。材質は頁岩で、遺構外からの出土である。

削 器（第20図57 写真図版12）

左側縁と末端部に連続する加工が施され、刃部が作出される。遺構外からの出土で、材質は頁岩である。

石 錐（第20図58・59 写真図版12）

59は両側縁に加工が施され、剥片の末端が刃部となる。58は両面加工が施され、棒状を呈する。两者とも遺構外からの出土で、材質は頁岩である。

剥 片（第20～22図60～79 写真図版13）

60と61は接合する。表裏面に同方向からの打撃による剥離が認められる。打面調整は見られないが、連続して剥離を行ったことがわかる。

打製石斧（第23図80 写真図版14）

断面が三角形を呈する安山岩製の石斧である。基部を欠損する。

石 横（第23図81・82 写真図版14）

两者とも多方向からの剥離面で構成されており、打面を頻繁に変える剥片生産技術の存在を暗示するものと考えられる。2点とも遺構外からの出土で、材質は頁岩である。

磨 石（第24図83・84 写真図版14）

いずれも安山岩製で、表裏面に明瞭な擦痕が認められる。83の側縁には敲打痕も見られる。

凹 石（第24図85 写真図版14）

凝灰岩製で、表裏面に擦痕と凹部をもつ。

VI 理化学分析結果

リン・カルシウム分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
植木真吾・齋藤紀行・高橋裕美

はじめに

本報告では、縄文時代の墓と考えられる土坑について、遺体が埋葬されていた可能性を検証することを目的にリン酸・カルシウム分析を実施する。本調査では土坑埋土といわゆる地山におけるリン酸・カルシウム含量を比較することにより、遺体埋葬の痕跡を確認する。

1 試 料

対象とする土坑は、SK245である。試料は、土坑内南側の石の脇から採取された試料①(石脇土壤)と石の下の試料④(石下部土壤)、土坑内埋土から採取された試料②(断面1層目土壤)と試料③(断面2層目土壤)、土坑下の地山から採取された試料⑤(土坑下地山土壤)および比較試料として土坑外から採取された試料⑥(地山土壤)の計6点である。

2 分析方法

本調査では、土壤中に含まれるリン酸およびカルシウムの含量を測定する。リン酸はとくに骨に多量に含まれ、土壤中では比較的拡散・移動しにくいため、その局所的な濃集状況から遺体・骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法とされている。また、カルシウムはリン酸とともに骨の主成分であることから、その濃集状況も遺体埋葬の手がかりとなる可能性がある。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光光度法でそれぞれ行った(土壤養分測定法委員会、1981)。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの粒を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO₃)5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸(P₂O₅)濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

表1. 土壤理化学分析結果

試料名	土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO(mg/g)
①石脇土壤	LIC	10YR3/2 黒褐色	0.85	0.63
②断面1層目土壤	LIC	10YR2/2 黒褐色	1.13	0.94
③断面2層目土壤	LIC	10YR2/3 黒褐色	0.91	0.80
④石下部土壤	LIC	10YR3/4 喀褐色	0.74	0.73
⑤土坑下地山土壤	LIC	10YR4/4 楊褐色	0.83	0.77
⑥地山土壤	LIC	10YR4/6 楊褐色	0.69	0.49

注。(1)土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2)土性:土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性による。
LIC…軽塗土(粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)

3 結 果

分析結果を表1に示す。リン酸含量、カルシウム含量とともに比較試料の試料⑥(地山土壤)で最も少なく、 $0.69\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、 0.49CaOmg/g を示す。なお、土坑内試料では試料②(断面1層目土壤)でリン酸含量、カルシウム含量が最も高く、 $1.13\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、 0.94CaOmg/g の値を示しているが、リン酸やカルシウムが著しく富化されている状況ではない。

4 考 察

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然貯存量については、いくつかの報告事例があるが(Bowen,1983;Bolt·Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991)、これらの事例から推定される天然貯存量の上限は約 $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では $5.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ (川崎ほか,1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では $6.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然貯存量は普通 $1\sim 50\text{CaOmg/g}$ (藤貫,1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。

今回の土坑内試料はいずれも比較試料の試料⑥(地山土壤)と比べてリン酸およびカルシウムがやや多い傾向にはあるが、いずれも天然貯存量の範囲に収まっている。ここで、土壤中に含まれるリン酸の給源としては動物遺体埋葬や施肥などの人為的要因のほか、植物遺体に由来する自然蓄積がある。今回は腐植含量の調査を実施していないので正確な評価は難しいが、試料⑥(地山土壤)と比べると、土坑内試料の色相は同一であるが、明度や彩度が小さいことから土壤腐植が多いと考えられる。したがって、土坑内試料においてリン酸やカルシウムがわずかに多い傾向は土壤腐植に由来するものであると考えられる。これらのことから、今回の土坑内試料には遺体成分が残留しているとは捉えられず、遺体埋葬の可能性を積極的に支持することは難しい。

参考文献

- 天野洋司・太田健・草場敬・中井信,1991,中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量,農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36.
- Bowen,H.J.M.,1983,環境無機化学-元素の循環と生化学-,浅見輝男・茅野充男訳,博友社,297p.
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.,1980,土壤の化学,岩田進午・三輪泰太郎・井上隆弘・福捷行訳,学会出版センター,309p.
- 土壤養分測定法委員会編,1981,土壤養分分析法,養賢堂,440p.
- 藤貫正,1979,カルシウム,地質調査所化学分析法,52,57-61.
- 川崎弘・吉田満・井上恒久,1991,九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量,農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会,1984,野外土性の判定-ペドロジスト懇談会編 土壤調査ハンドブック,博友社,39-40.

VII まとめ

今回の調査は、一般国道344号特殊改良一種事業に伴う滝ノ沢山遺跡の発掘調査である。調査概要と得られた成果を以下に述べる。

滝ノ沢山遺跡は、山形県最上郡真室川町大字大沢字滝ノ沢山に所在し、鮭川と真室川にはさまれた高位段丘上に立地する。標高は134mを測る。発掘調査は、遺跡にかかる事業実施区域の約1,500m²を対象に実施した。

調査前の地目が雑木林で、調査区内に樹木伐採後の木根が多数残っている状態だった。できるだけ木根を除去しながら面整理・遺構検出を行っていった。その結果、倒木痕も8基検出され、その中から流れ込んだ遺物が検出されたものもあれば、他の遺構と切り合うものもあった。また、ピットも多数検出したが、根による擾乱も非常に多かった。

検出された遺構は、土坑及びピット群、焼土、陥穴4基である。住居跡は確認されていない。遺物はほとんどが縄文時代のもので、縄文土器と石器合わせて整理箱3箱出土した。遺構外からであったが、流れ込みと思われる平安時代（9世紀）の須恵器壺の破片1片も出土している（第18図50・写真図版10）。

遺物は出土量が少なく、遺物を伴った遺構も少なかった。貝殻腹縁圧痕文が施された縄文時代早期の土器がSK6から、SP65とSP337から中期の土器が數片ずつ出土した程度である。その他の遺構外から出土した土器片や石器・剥片などは、ほかからの流れ込みと判断されるものも少なくない。

ただ、早期の縄文土器がまとまって出土した例は県内では珍しく、尾花沢市いるかい遺跡（阿部1983）、山形市にひゃく寺遺跡（安部1985）、南陽市月ノ木B遺跡（黒坂1989）などが代表的な遺跡として挙げられる。最上郡内では、新庄市で新庄中核工業団地造成工事に伴い発見された福田山A遺跡と仁間瀬ノ沢B遺跡に類似が見られる程度である。

陥穴は4基検出されたが、時期を特定できるような遺物は出土しなかった。また、いずれの陥穴も調査区中央よりやや南側、沢に向かって下っていく箇所に平行に掘

られていた。このことは、沢に水を飲みにきた動物が自然に落下するようにしたのか、あるいは高台の方から獲物を追いかけて落としたのか等、推測される。

焼土が2基調査区北端と中央よりやや北東側で検出された。周辺にはいくつかのピットは検出されたものの、住居跡の炉跡をなすものかどうか確認するまでには至らなかった。ただし、陥穴が4基検出されたこと、調査区中央よりやや南東の焼面を拡張した区域から、石核や剥片などが少なからず出土したことなどを考慮すると、この場所が縄文時代の狩猟場や狩猟・採集のためのキャンプサイト的な場であったのではないかと考えることもできる。そう考えると、住居を伴う集落跡などはもっと高台のほうにあり、この焼土はたき火をした跡とも推測される。

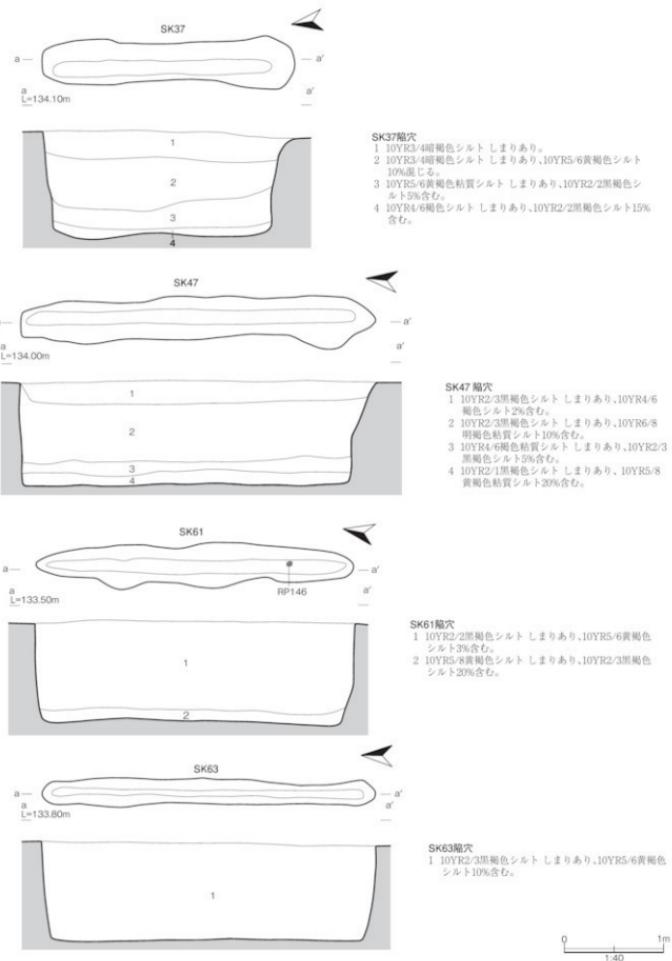
量的には少なかったものの、本遺跡からは、縄文時代早期中葉の貝殻腹縁圧痕文が施された田戸下層式、早期末葉の竹管刺突文や貝殻条痕の施された茅山上層式に併行するものから、前期の大木4式や中期の大木7b式・8a式に併行するもの、突起や瘤の付いた縄文時代後期までの土器が出土したことから、幅広い期間営まれた遺跡ということができる。

他遺跡との関連であるが、山形県の遺跡地図には同じ真室川町の秋山地内に、3ヶ所の縄文時代前期と中期の集落跡・散布地が登録されている。更に、滝ノ沢山遺跡のある高位段丘を南東・南西の方角へそれぞれ2kmほど下った区域には、縄文時代後期の集落跡・散布地の登録があり、それらの遺跡との関連が注目される。

また、従来は拠点的な集落遺跡の報告が注目されてきたが、本遺跡のようなキャンプサイト的遺跡の報告事例は少なく、遺跡相互の関係を把握する上で貴重な事例といえよう。

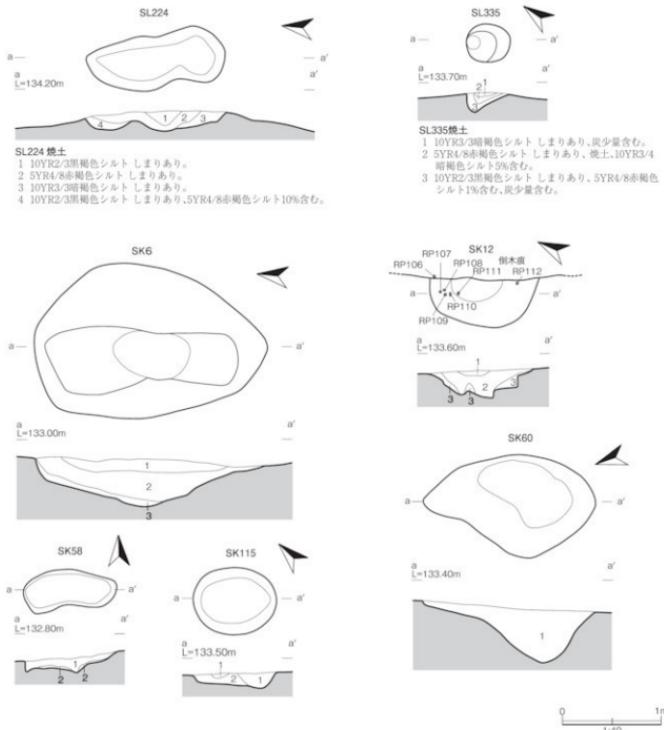
参考文献

- 大友義助ほか 1969 「真室川町史」 真室川町史編集委員会
- 佐藤庄一 1981 「新庄中核工業団地周辺遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第43集) 山形県教育委員会
- 阿部明彦 1983 「いろいろい遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第69集) 山形県教育委員会
- 安部実 1985 「にひゃく寺遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第92集) 山形県教育委員会
- 黒坂雅人ほか 1989 「月ノ木B遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第135集) 山形県教育委員会
- 黒坂雅人ほか 2001 「中台4・5遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第84集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 佐竹桂一 2002 「中川原C遺跡・立泉川遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第98集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 黒坂雅人 2003 「金浦C遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 木戸部秀樹 2005 「空沢遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第144集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 石井清幸 2007 「中川原C遺跡第4次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第163集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 菅原哲文ほか 2008 「地坂台遺跡・下中田遺跡・太郎水野1遺跡・太郎水野2遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第166集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター



第10図 SK37・47・61・63隘穴

遺構実測図



SK6 土壌

- 1 10YR2/3暗褐色シルト しまりあり、微量含む。
- 2 10YR3/4暗褐色シルト しまりあり、10YR5/6黄褐色シルト
3%含む、微量含む。
- 3 10YR4/6褐色シルト しまりあり。

SK12 土壌

- 1 10YR2/2暗褐色シルト 粘性あり。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト
- 3 10YR3/3暗褐色シルト 10YR5/6黄褐色シルト20%含む。

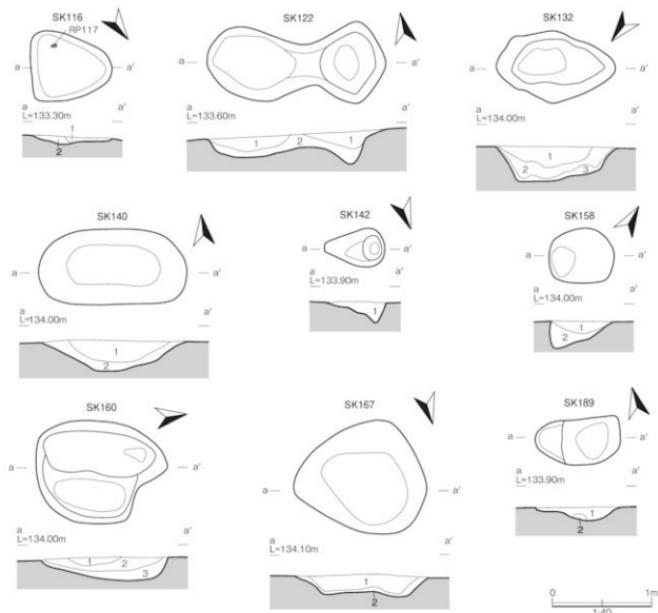
SK58 土壌

- 1 10YR4/4褐色シルト
- 2 10YR3/4暗褐色シルト

SK60 土壌

- 1 10YR3/4暗褐色シルト しまりあり、10YR5/6黄褐色
シルト30%まだらに含む。

第11図 SL224・335焼土 SK 6・12・58・60・115土壌

**SK116土壤**

- 1 10YR4/4褐色シルト 10Y5/6黄褐色シルト5%含む。
- 2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性あり、10YR4/6褐色シルト20%含む。

SK122土壤

- 1 10YR3/3暗褐色シルト しまりあり。
- 2 10YR2/3黒褐色シルト しまりあり。10YR5/6黄褐色シルト40%含む。

SK132土壤

- 1 10YR3/4暗褐色シルト しまりあり。
- 2 10YR2/3黒褐色シルト しまりあり。
- 3 10YR4/6褐色シルト しまりあり、10YR2/3黒褐色シルト10%含む。

SK140土壤

- 1 10YR2/2黒褐色シルト しまりあり。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト しまりあり。10YR5/6黄褐色シルト10%含む。

SK142土壤

- 1 10YR3/2黒褐色シルト

SK158土壤
1 10YR2/3黒褐色シルト しまりあり。
2 10YR2/3黒褐色シルト 10YR3/4暗褐色シルト10%含む。

SK160土壤

- 1 10YR2/3黒褐色シルト しまりあり。

SK167土壤
1 10YR2/3黒褐色シルト しまりあり。

SK189土壤
1 10YR3/2黒褐色シルト しまりあり。

SK116-122-132-140-142-158-160-167-189土壤
1 10YR3/3暗褐色シルト しまりあり。10YR5/6黄褐色シルト10%含む。

SK167土壤

- 1 10YR2/2黒褐色シルト しまりあり。

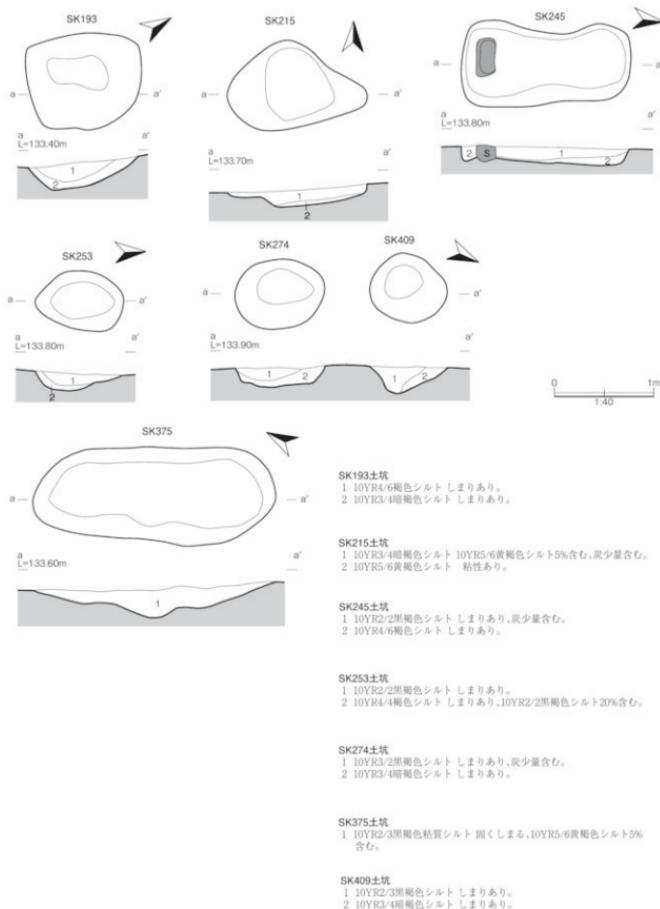
SK189土壤
1 10YR3/3暗褐色シルト しまりあり、10YR4/4褐色シルト10%含む。

SK189土壤

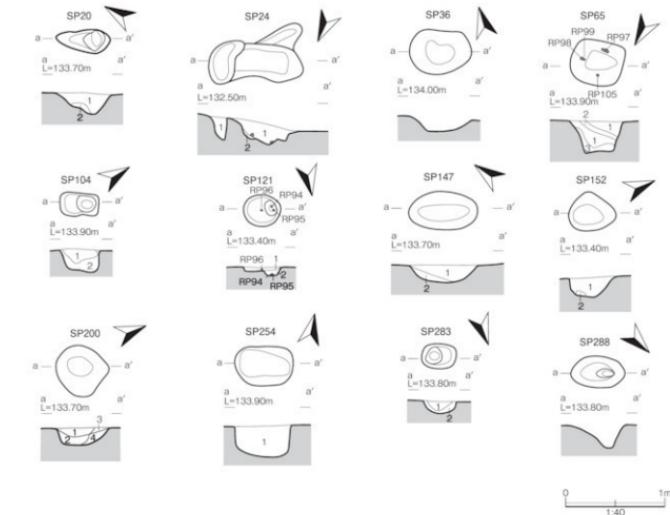
- 1 10YR3/3暗褐色シルト しまりあり、10YR4/4褐色シルト10%含む。

SK116-122-132-140-142-158-160-167-189土壤
2 10YR2/3黒褐色シルト

遺構実測図



第13図 S K 193-215-245-253-274-375-409土坑

**SP20ピット**

- 1 10YR4/6褐色シルト 5YR5-6明赤褐色シルト3%含む、底、木の実含む。
- 2 10YR5-6黄褐色シルト しまり、粘性あり。

SP24ピット

- 1 10YR2/2黒褐色シルト しまりなし。
- 2 10YR4/6褐色シルト 粘性あり、10YR3/4暗褐色シルト20%含む。

SP65ピット

- 1 10YR3/4褐色シルト 10YR6/8明黄褐色シルトを5%含む。
- 2 10YR2/1黒色シルト
- 3 10YR4/4褐色シルト 粘性あり。

SP104ピット

- 1 10YR4/6褐色シルト 粘性あり、固くしまる、10YR3/1黒褐色シルト 10%含む。
- 2 10YR5-6黄褐色シルト しまりあり。

SP121ピット

- 1 10YR3-4褐色シルト 粘性あり、炭少含む。
- 2 10YR5-6黄褐色シルト しまり、粘性あり。

SP147ピット

- 1 10YR3/2黒褐色シルト 10YR4/6褐色シルト20%含む。
- 2 10YR4/6褐色粘質シルト しまりあり。

SP152ピット

- 1 10YR2/3暗褐色シルト 10YR5-6黄褐色シルト5%含む、炭少含む。
- 2 10YR4/2黒褐色シルト 粘性あり、10YR5-6黄褐色シルト20%含む。

SP200ピット

- 1 10YR3/2褐色シルト 粘性あり、固くしまる。
- 2 10YR4/6褐色シルト 粘性あり、固くしまる。
- 3 10YR4/3にへ褐色シルト 粘性あり、固くしまる。
- 4 10YR5-6黄褐色シルト 粘性あり、固くしまる。

SP254ピット

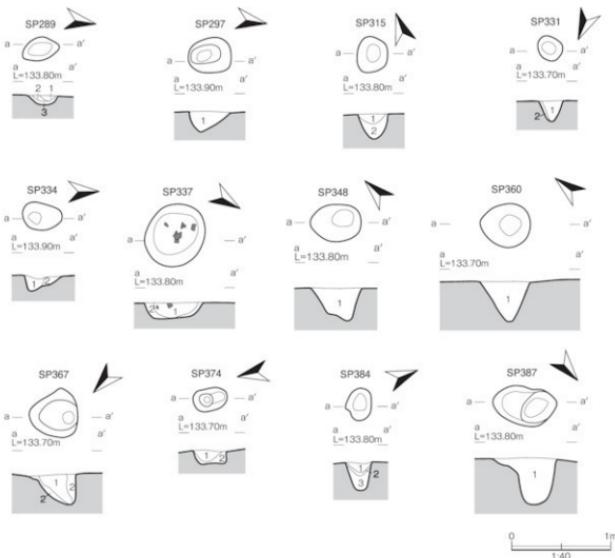
- 1 10YR2/3暗褐色シルト しまりあり、10YR4/6褐色粘質シルト(固くしまる)10%含む。

SP283ピット

- 1 10YR2/2黒褐色シルト
- 2 10YR4/6褐色シルト 粘性あり、固くしまる、5YR4/8赤褐色粘質シルト(固くしまる)5%含む。

第14図 SP20・24・36・65・104・121・147・152・200・254・288ピット

遺構実測図



SP289ピット

- 1 10YR2/1黒色シルト 粘性あり、固くしまる。
- 2 10YR2/3暗褐色シルト しまりあり。
- 3 10YR4/4褐色シルト 粘性あり、固くしまる。

SP297ピット

- 1 10YR2/3暗褐色シルト しまりあり、少微量含む。10YR4/4褐色シルト5%含む。

SP315ピット

- 1 10YR2/1黒色シルト しまりあり、10YR5/6黄褐色シルト5%含む。
- 2 10YR4/4褐色粘性シルト しまりあり。

SP334ピット

- 1 10YR2/3黒褐色シルト しまりあり。
- 2 10YR3/4暗褐色シルト しまりあり。

SP337ピット

- 1 10YR2/3暗褐色シルト しまりあり、10YR4/4褐色シルト5%含む。

SP357ピット

- 1 10YR2/2黒褐色シルト しまりあり、10YR4/6褐色シルト5%含む。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト しまりあり、10YR4/6褐色シルト10%含む。

SP348ピット

- 1 10YR2/3黒褐色シルト しまりなし。

SP360ピット

- 1 10YR3/4暗褐色シルト しまりあり。

SP367ピット

- 1 10YR2/3暗褐色シルト しまりなし。
- 2 10YR4/6褐色粘性シルト。

SP374ピット

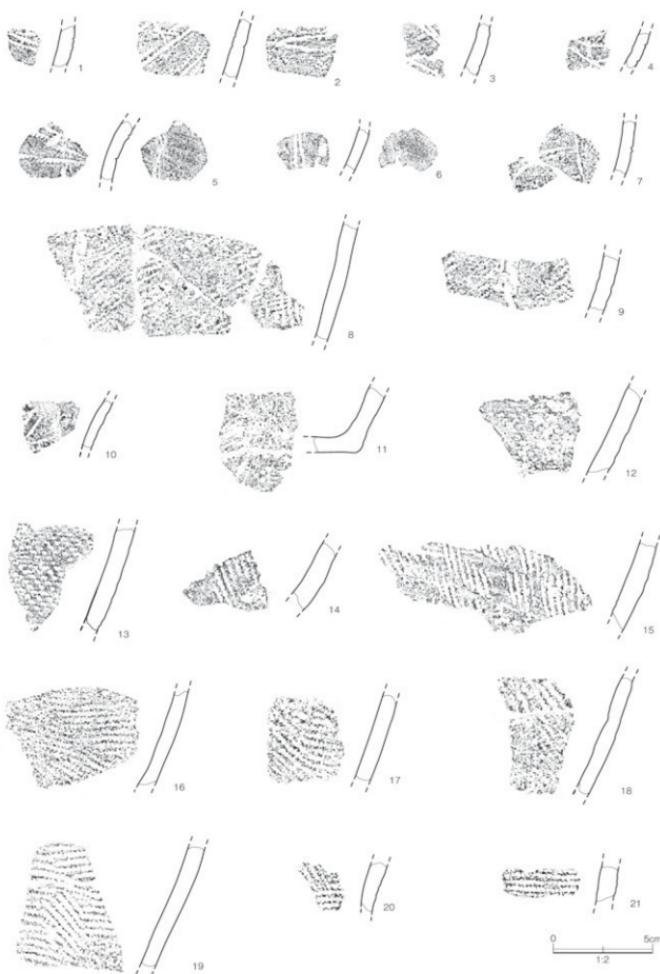
- 1 10YR2/1褐色シルト しまりあり。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト しまりあり。

SP384ピット

- 1 10YR2/3黒褐色シルト しまりあり。
- 2 10YR4/6褐色シルト しまりあり。
- 3 10YR3/3暗褐色シルト しまりあり、10YR4/6褐色シルト3%含む。

SP387ピット

- 1 10YR2/3暗褐色シルト しまりあり。



第16図 繩文土器(1~21)

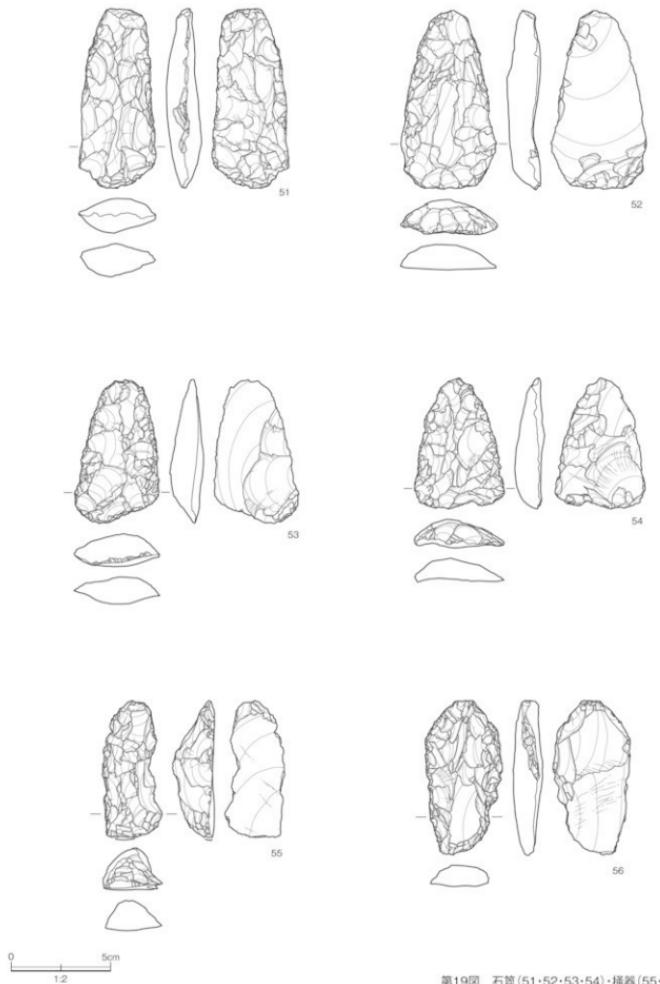


第17図 繩文土器(22~33)

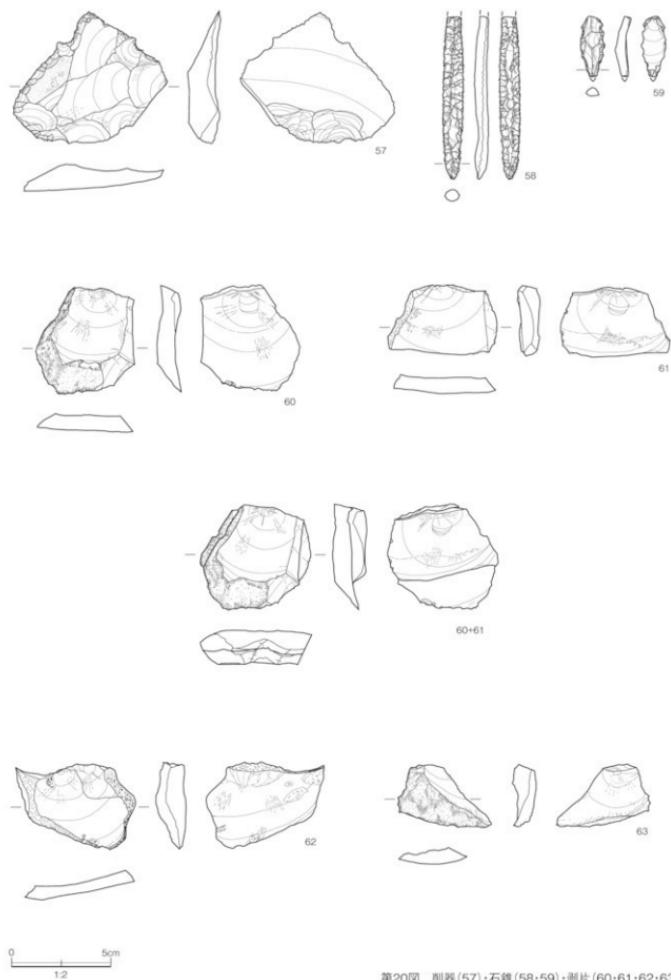


第18図 繩文土器(34~49)・須患者(50)

遗物实测图

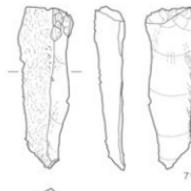
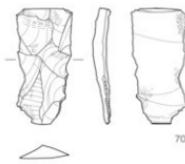
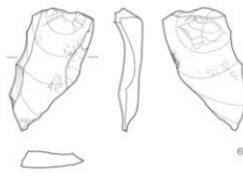
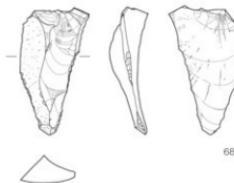
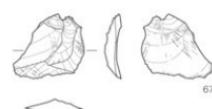
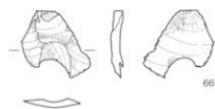
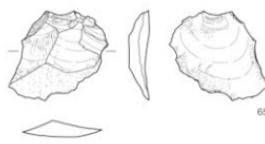
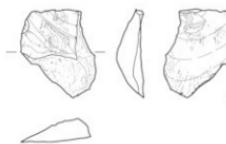


第19图 石器(51·52·53·54)·砾器(55·56)



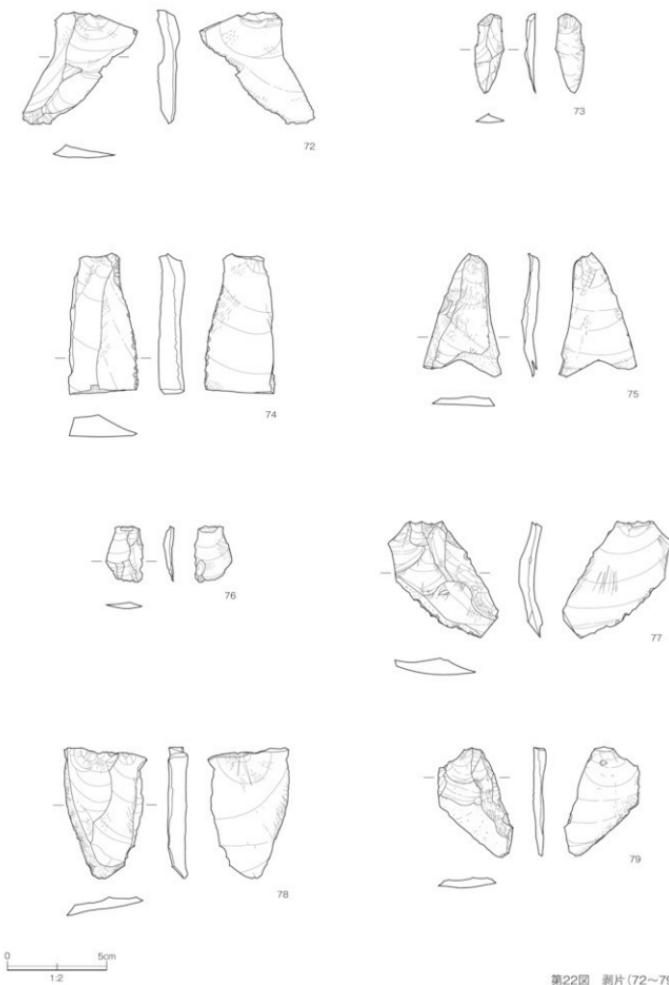
第20図 削器(57)・石錐(58・59)・剥片(60・61・62・63)

遗物实测图



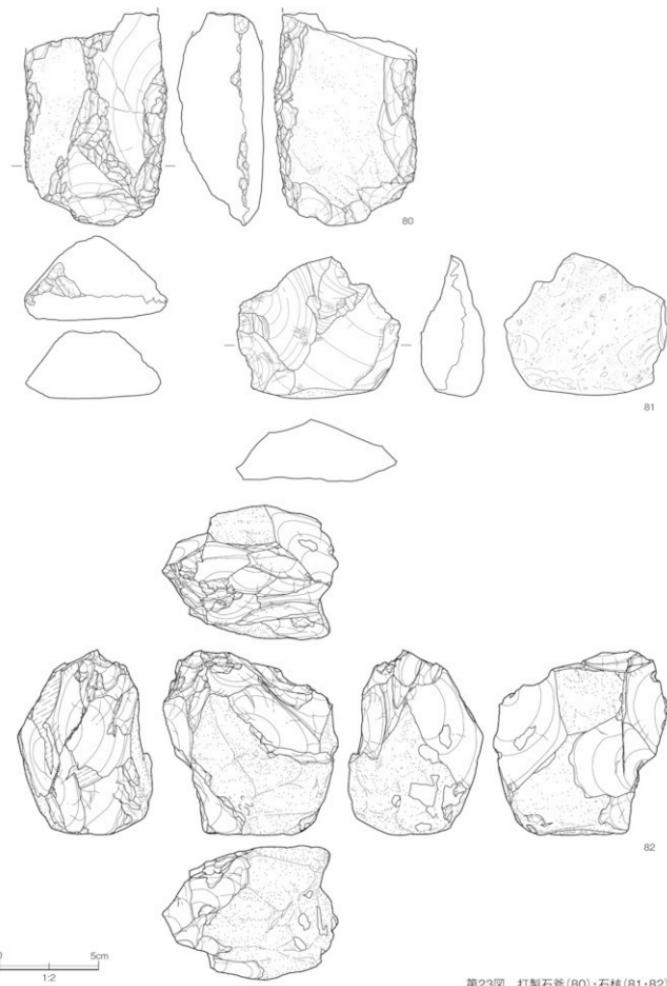
0 1 2 5cm

第21図 剥片(64~71)

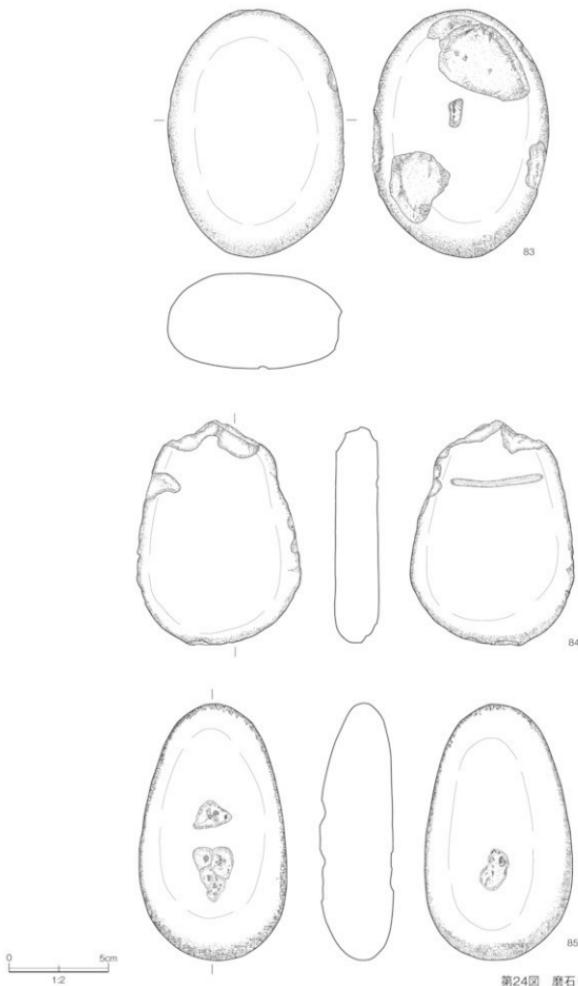


第22図 剥片(72~79)

遺物実測図



第23図 打製石斧(80)・石核(81・82)



第24図 磨石(83-84)・凹石(85)

表2 繩文土器・須恵器観察表

博物 番号	RP	器種	出土区 層厚 [m]	文様	縄文原体	調整		胎土・焼成・その他
						外面	内面	
1	115	不明	SK6	7.5	貝紋縁压痕文			砂粒混、石英
2	116	不明	SK6	7	貝紋縁压痕文			砂粒混、海綿骨針、雲母、石英
3	118	不明	SK6	7	貝紋縁压痕文			砂粒混、海綿骨針、RP119と接合
4	138	深鉢	SK6	5	貝紋縁压痕文			ナガ 砂粒混
5	141	不明	SK6	6.5	貝紋縁压痕文			ナガ 砂粒混、石英
6	144	深鉢	SK6	5	貝紋縁压痕文			ナガ 砂粒混、石英
7	125	深鉢	SK6	6.5	沈織文			ナガ 砂粒混、石英、海綿骨針、RP137と接合
8	15	深鉢	SK12	7		RLR		ナガ 粗砂混、RP107.109.110.111と接合
9	16	不明	4.5	8		RLR		ナガ 粗砂混、RP15と同一個体
10	102	深鉢	SK116	5	沈織文			砂粒混、石英
11	124	深鉢	SK37	9				ナガ 粗砂混、石英
12	98-1	深鉢	SP65	9		LR		砂粒混、石英、外側に炭化物付着、内外面剥落により唇面剥落
13	98-2	深鉢	SP65	9		LR		砂粒混、石英、外側に炭化物付着、内外面剥落により唇面剥落
14	99	深鉢	SP65	10		LR		ミガキ 砂粒混、石英
15	97	深鉢	SP65	9		LR		ナガ 砂粒混
16	126	深鉢	SP337	7		LR		砂粒混、石英
17	127	深鉢	SP337	7.5		LR		砂粒混
18	128	深鉢	SP337	7.5		LR		砂粒混、石英、RP129と接合
19	130	深鉢	SP337	8		LR		砂粒混、石英、RP140と接合
20	131	深鉢	SP337	8		LR		砂粒混、石英
21	132	深鉢	SP337	9		LR		砂粒混、石英
22	94	深鉢	SP121	6	竹管割文、貝紋条痕			砂粒混、石英
23	135	深鉢	SP385	8		LR		ナガ 砂粒混、雲母、外面に炭化物付着
24		深鉢	XO	9	織文、条痕文	RL		砂粒混、石英
25	14-1	深鉢	4.5	10.5	小波状文		ケズリ	ナガ 砂粒混、石英、外面に炭化物付着
26	14-2	深鉢	4.5	9	網目状燃条文	單軸絶条体第5類 R		ナガ 砂粒混、石英
27	64	深鉢	17.5	7	沈織文			ナガ 砂粒混、石英
28		深鉢	XO	9	網目状燃条文	單軸絶条体第5類 R		ナガ 砂粒混、石英
29	33	深鉢	7.2	10	平行沈織文	LR		ナガ 砂粒混、石英
30	21	深鉢	34	9.5	波状文・網目		ナガ	砂粒混
31		深鉢	南側	10	波状文・網目			ナガ 砂粒混、石英
32		深鉢	西側	9.5	沈織文		ナガ	砂粒混、石英
33	30	深鉢	6.2	9	刻目	LR	ナガ	砂粒混、石英
34	49	深鉢	8.6	9	燃条压痕文	L	ミガキ	ナガ 砂粒混
35	19	深鉢	3.5	9	RLR Q段多条		ミガキ	砂粒混、被熱で内面の器面剥落、RP20と接合
36	68	深鉢	19.9	8.5		LR		砂粒混、石英
37		深鉢	東側	6		RL		ナガ 砂粒混、石英
38		深鉢	東側	7.5		RL		ナガ 砂粒混、石英
39	35	深鉢	7.2	8		LR		ナガ 砂粒混、石英
40		深鉢	中央	9			ナガ	砂粒混、石英
41		浅鉢	中央	10			ナガ	砂粒混、石英、海綿骨針
42	154	深鉢	側木底3	7.5		L		ナガ 砂粒混、石英多い
43	52	深鉢	8.6	7		L		ナガ 砂粒混、外面に炭化物付着
44	27	深鉢	4.2	6		LR		粗砂混、石英、外面に炭化物付着
45	18	深鉢	3.5	8	RLR Q段多条		ミガキ	砂粒混、被熱で内面の器面剥落
46	22	深鉢	3.4	8		RLR	ナガ	粗砂混、RP23と接合
47	70	深鉢	20.8	7		LR	ミガキ	粗砂混、海綿骨針、被熱が激しく、外面の器面剥落
48	51	深鉢	8.7	8	突起	LR	ナガ	粗砂混、石英
49	60	盤か鉢	10.6	6.5	平行沈織文		ナガ	ミガキ 細砂混、石英
50		坏	南側	6.5			ロクロナガ	ロクロナガ 領惑器

表3 石器観察表

探査 番号	RQ	性質	遺構・グリッド 出土区	石材	計測値 (mm)				破損・加工・ その他
					長さ	幅	厚さ	重量(g)	
51	61	石斧	15-3	頁岩	90.0	39.0	17.5	58.8	
52	89	石剣	17-7	頁岩	89.5	48.5	17.5	59.8	
53	29	石剣	5-2	頁岩	72.5	43.0	17.0	42.4	
54		石剣	西側	頁岩	66.0	45.0	15.0	34.5	
55	13	搔器	5-6	頁岩	69.0	30.0	21.5	33.3	
56	58	搔器	10-3	頁岩	77.5	39.0	15.0	38.9	
57		刮器	東側	頁岩	66.0	77.5	16.5	61.4	
58	156	石錐	側木痕3	頁岩	81.5	11.0	7.0	5.8	
59	44	石錐	6-6	頁岩	30.5	12.0	8.0	1.9	
60	47	剥片	7-6	頁岩	53.5	49.5	12.0	27.0	
61	39	剥片	5-6	頁岩	35.0	54.5	11.5	22.9	
60+61					52.5	55.0	17.0	49.9	RQ39とRQ47との接合
62	41	剥片	5-6	頁岩	43.0	60.5	15.0	24.9	
63		剥片	東側	頁岩	31.5	48.0	12.0	10.7	
64	40	剥片	5-6	頁岩	44.0	14.0	14.5	14.6	
65	158	剥片	側木痕3	頁岩	45.0	50.0	10.0	14.2	
66	36	剥片	5-5	頁岩	34.0	35.5	6.0	3.5	
67	157	剥片	5-6	頁岩	32.5	35.0	8.0	6.0	
68	59	剥片	10-5	頁岩	64.5	35.0	19.5	20.6	
69	87	剥片	13-4	頁岩	62.0	43.0	14.0	20.4	
70	12	剥片	5-6	頁岩	58.0	28.0	9.0	10.5	
71	82	剥片	SK167	頁岩	82.0	28.0	15.0	25.4	
72		剥片	中央	頁岩	56.5	57.0	11.0	14.7	
73	83	剥片	15-8	頁岩	40.0	14.0	5.5	1.7	
74	25	剥片	4-2	頁岩	70.5	35.0	13.0	35.7	
75	153	剥片	側木痕7	頁岩	62.5	4.0	8.0	11.1	
76	5	剥片	4-6	頁岩	28.0	18.0	5.5	2.0	
77	62	剥片	15-4	頁岩	58.0	54.0	12.0	20.7	
78	85	剥片	SP113	凝灰岩	66.0	41.0	10.0	19.0	
79	65	剥片	17-7	頁岩	55.0	33.5	6.5	8.5	
80	24	石斧	4-2	安山岩	107.0	71.5	43.0	390.6	
81	53	石核	8-5	頁岩	71.0	82.5	31.5	170.8	
82	42	石核	6-6	頁岩	93.0	88.0	67.5	533.1	
83	57	磨石	10-1	安山岩	123.5	88.5	51.0	699.2	
84		磨石	4-5	安山岩	122.0	90.0	24.0	401.8	
85	71	凹石	20-8	凝灰岩	128.0	74.0	38.0	443.8	

写真図版



調査前の全景(北西から)



完掘状況(北西から)



調査区北側遺構検出状況(南から)



竪穴検出状況(東から)



SK37陥穴(北から)



SK37陥穴断面(西から)



SK47陥穴(北西から)



SK47陥穴断面(西から)



SK61陥穴(北から)



SK61陥穴断面(西から)



SK63陥穴(北から)



SK63陥穴断面(西から)



SL224焼土棟出状況(西から)



SL224焼土断面(北西から)



SL224焼土完掘状況(西から)



SL335焼土棟出状況(西から)



SL335焼土完掘状況(北から)



SK6土坑断面(西から)



SK12土坑断面(北西から)



SK60土坑断面(西から)



SK115土坑断面(西から)



SK116土坑断面(南西から)



SK122土坑断面



SK132土坑断面(南から)



SK140土坑断面(南から)



SK158土坑断面(南から)



SK160土坑断面(北から)



SK189土坑断面(南西から)



SK193土坑断面(西から)



SK245土坑断面(南東から)



SK245土坑断面(南から)



SK274・SK409土坑断面(北西から)



SK375土坑断面(南から)



SP20ピット断面(西から)



SP65ピット遺物出土状況(南から)



SP104ピット断面(東から)



SP121ピット遺物出土状況(南から)



SP200ピット断面(南東から)



SP315ピット遺物出土状況(南西から)



SP337ピット遺物出土状況(北西から)



SP384ピット完掘状況(北西から)



重機稼動状況



木根伐採作業



面整理事業



拡張部分掘り下げ状況



記録作業状況



写真撮影状況



隙間掘り下げ状況



発掘調査説明会(7月15日)



SK6土坑出土・縄文時代早期の土器

SP65ビット出土・縄文時代中期の土器

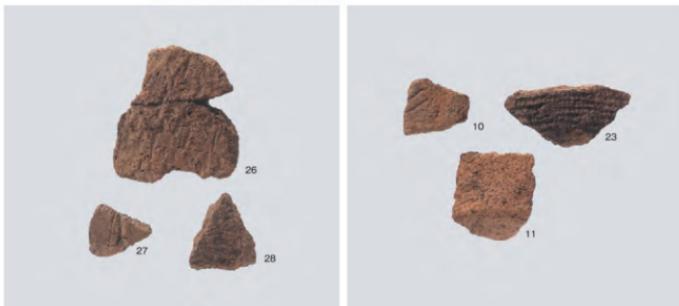


SP337ビット出土・縄文時代中期の土器

縄文時代中期・大木7b・8a式期土器

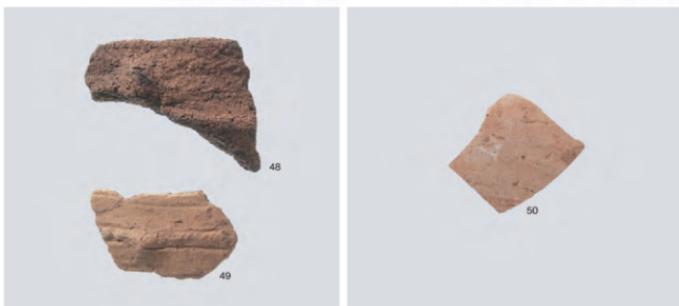


縄文時代早期と前期大木4式期土器



遺構外出土・縄文時代前期の土器

SK116・37土坑とSP385ピット出土の土器



遺構外出土・縄文時代後期の土器

平安時代・須恵器坏



SK12土坑と遺構外出土の土器



遺構外出土の土器



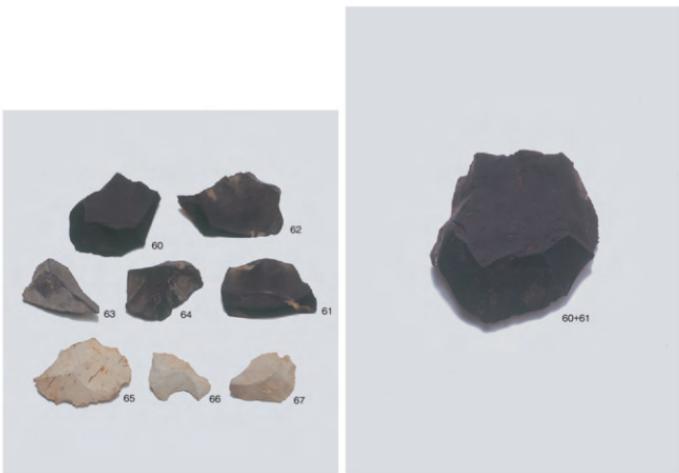
石刮



刮器·削器



石钻



剥片



打製石斧

磨石·凹石



石核

報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第181集

滝ノ沢山遺跡発掘調査報告書

2009年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 株式会社アサヒ印刷
〒990-2251 山形県山形市立谷川二丁目486-14
電話 023-686-4331